

「令和5年度 配慮を必要とする子どもの保育研修会」報告書

- 1、日時：令和5年11月2日（木）12：30～16：30
- 2、場所：ロイヤルチェスター佐賀
- 3、研修名：対応に迷うこどもたちと保護者への保育の手立て
- 4、講師名：野藤^{のとう ひろゆき}弘幸氏
(作業療法学博士・元常葉大学保健医療学部教授)
- 5、参加者： 103名（会場： 36名・オンライン： 67名）
- 6、研修の内容：対応に迷うこどもたちを知る



1) 対応に迷うこどもの行動を、3つのキーワードで理解する

①注意力

- ・同時にいくつものことに注意を配って段取りをとる力。
- ・時間をかけて取り組み続けることは、結果がでるまでやり続けること。
それは結果まで待つ気持ち=我慢する気持ち=時間の感覚
- ・言葉で表現することと結びつく。

②感受性

- ・身体の外を感じる感覚（見る・聞く・触る・におう）
- ・身体の中を感じる感覚（味わう・聞く・生理的感覚・気持ち）

③身体のリズム

- ・身体を落ち着けるリズム と 身体を活発にするリズム。
- ・身体の外を感じる > 身体の中を感じる



2) 発達障害の診断について知る

どれかひとつの診断がついているにしても、その診断で表される以外の行動がみられることももいる。

① 自閉スペクトラム症 (ASD) :

見る・聞く・触る・におう感覚に敏感。

味わう・動く・こころの感覚は苦手。

② 注意欠陥・多動症 (ADHD) :

忘れっぽい・思いついたら行動する・じっとしてられない・ぼーっとするなど、こういった姿の何れかを、自分の思いではなくとってしまう。

③ 限局性学習症 (LD) :

読む・書く・計算する・推しはかる・といった学業の何かは、努力を超えて難しい。

④ 発達性強調運動症 (DCD)

同時にいくつかの行動がとれず、運動のタイミングや段取りに困っている。

⑤ 知的障害・HSC との関係

3) 気になるこどもの問題行動と愛着関係の問題

【対応に迷うこどもの行動について、事例をとおして考える】

① 食事の時に、椅子に座って肩ひじをついて食べる。

・「お行儀よく食べてね」⇒「肘はつかないよ」「背中は伸ばして」等、具体的に伝える。

② 集団で話しを聞く時や絵本を見る時にお喋りが止まらない。

・お喋りを止めない。

・話しを聞くことが難しい子だということを大人が理解する。

・話しを聞ける環境なのかを考える。

・他児と一緒に聞くことが難しいのであれば、本児が好む本を別の空間で読めるように配慮する。

③ 身支度に時間がかかる。「面倒くさい」と言う。

・「面倒くさい」= どうしていいのかわからない。



- ④ 石を思いっきり投げる・虫を捕まえて身体をちぎる等、止めても聞き入れない。
- ・力加減がわからない。
 - ・過集中。
 - ・虫を与えない。→ 本児だけではなく、他児（保育園）や保護者（家庭）を巻き込んで取り組んでいく。
 - ・実物ではなく、虫の図鑑などを利用する。
 - ・まったく違うことに興味を持たせる。
 - ・小児神経科や児童精神科の医師に、服薬治療の必要を相談することも必要である。
- ⑤ 泣いている子を見て笑う。
- ・「笑わないでね。向こうで遊んできていいよ」等、声掛けや促しをする。
- ⑥ 特定の子に対して通せんぼしたり、押ししたり、相手が嫌がったりしても止めない。
- ・遊び方がわからない。
 - ・ふざけることが楽しい。
 - ・本児の主体性を促す → 大人が本児に合った遊びへ誘い、一緒に遊ぶ。
 - ・本児に便乗する他児に対しては、その行為を止める。
- ⑦ 些細な事で急に怒り出し、相手につかみかかり暴言を吐く。
- ・この行為に興奮する。
 - ・家庭での過ごし方が落ち着かないことが、保育園で表れる場合もある。
 - ・本児の気持ちに寄り添い続けると（共感）、変化がみられるかもしれない。

【対応に迷う保護者の行動について、事例をとおして考える】

- ① こどもの発達の問題や就学に向けての取り組みを「わかろう」「しよう」としない。
- ・わが子の状況が『当たり前（普通）』だと思っている保護者が大半である。
 - ・保育園で困っている行為を、少しずつ伝えていく。
 - ・専門機関（病院・臨床心理）へ相談にいけるような配慮をする。
- ② こどもが言うことを聞かないと、大きな声で怒りを表す。
- ③ 「疲れた」「こどもとは一緒にいたくない」と言う。
- ・言う＝自己分析ができています。
 - ・何をどうしていいのかわからず、困っている。
 - ・段取り（見通し）を立てることが難しい人である。
- ④ 保育者に要求を強いようとする。
- ・担任のみでなく、園の管理者が状況を把握し、法的な対応を検討する必要もある。

感想

今回の研修では、事例を基に子どもと保護者に対する対応策の話しを聞くことができた。様々な事例の中には、各自が今困っていることに類似した事例もあり、解決の糸口が見つかったのではないかと思う。デリケートな部分でもあり、なお且つ家庭と保育園だけの取り組みでは、到底どうにもならないケースもあり、行政や専門機関或いは医療機関との連携が最も大切であることを痛感した。また、保育者がどうにかしなければならぬと気負わずに、『今、私たちができることをお手伝いする』という気持ちで関わることも大切であるという話は、ほんの少し肩の荷が下りた保育士も少なくなかったと思う。

私たちができることは、その子が生きていく中で困らないような物的・人的環境を作り、そして適切な専門機関との連携を図ることであると考えている。

文責：社会福祉法人 健翔会
あいろん保育園
宮本 薫